慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	二つの大正デモクラシー論 : その今日的意味
Sub Title	Two types of study on "Taisho-democracy" : their significance to-day
Author	尾城, 太郎丸
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1974
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.67, No.12 (1974. 12) ,p.1240(78)- 1245(83)
JaLC DOI	10.14991/001.19741201-0078
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19741201-0078

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

資　料

二つの大正デモクラシー論

——その今日的意味——

尾　城　太　郎　丸

(一)

今日の時代状況のもとでは，西欧的な近代市民社会そのものが根本から問い直されるとともに，新憲法下の日本の戦後民主主義なるものの意味についても，深い反省が求められているのであるが，これは，当然のことながら，戦前の天皇制国家のもとで，その権力的・イデオロギー的支配に対決して来た「ブルジョア民主主義」の思想や運動の再検討もまた迫られることとなる。そうした場合，われわれは，どのような基本的な視座を設定したらよいのであろうか。

正直のところ，われわれ日本人は，戦後の高度成長による「経済繁栄」の社会で，「戦後民主主義」の形骸化・「虚妄化」が強く叫ばれるなかにあって，一種の戸惑いにも似た思想的混迷の状態に陥っている，といってもよい。というのは，そこでの問題が，進歩的とか保守的とかいう，大きな価値基準に関するものだからである。

すなわち，敗戦以来30年，われわれ日本人は，「上から」与えられた西欧的な民主主義（ブルジョア民主主義）を唯一絶対の価値基準として，およそ天皇制支配につながる，従来の伝統的な価値意識，生活感情や道徳の一切を，悪しき古きもの，「封建的」なものとしてしりぞけ，建前としては，いわば理性主義，合理主義乃至は近代主義に徹して来たのであり，こうした雰囲気が学問研究のあり方にも反映して，戦後の社会科学や歴史学や思想史の研究視角，したがって，マルクス主義的な日本資本主義研究（とくに，「講座派」的な問題意識），大塚史学的な発想（西欧市民社会と「近代的人間類型」の問題）あるいは，日本政治思想論における「丸山理論」等々に，一定の権威を認めて来たともいえる。そして，この戦後過程で，日本と日本人が，現代史に残る大きな変革をとげたことも，事実として認めねばなるまい。

けれども，われわれは，結局，日本人たることに変りはなかった。戦後の新しい営為の結果，そこに出来上ったものは，戦争責任をはぐらかした象徴天皇制下の「多数決民主主義」であり，国民大衆を組織・機構の奴隷と化した超管理社会であり，大国意識と差別意識をもち続ける驕慢なエコノミック・アニマルであった。国栄えて山河亡び，人心すさび，世の乱れ狂う様を前にして，人々は慨嘆と自省の想いを深めざるを得ないのである。日本人にとって，「戦後民主主義」とは，果して何であったのか，そして戦前の「ブルジョア民主主義」運動——明治の自由民権，大正デモクラシーとは……。

今日もなお，建前としては，西欧的民主主義の伝統はひろく尊重され，保守・革新の政治的立場に係わりなく，その価値意識が既に社会通念化しているかに見えながら，その反面では，「草の根」の生活次元に立つ自発的な民衆運動の力を通じて，「戦後民主主義」の「欺瞞性」が厳しく問い直されつつあり，しかも，そこで，戦後の「民主化」・「近代化」の営みによって葬り去られて来た伝統的・土俗的な価値意識，「日本的なるもの」への回帰，いわゆる「常民」の再評価への志向が異常な昂まりを見せている。こうした状況のもとで，われわれの民主主義は，どのような新しい内容を盛り込んで行けるのだろうか。

ここにとり上げる二つの大正デモクラシー論（二つの論著）は，日本の近・現代史における民主主義の思想・運動について，それぞれ，そこに見られる全く相対立した，対照的な二つの傾向を分析したものであるが，以上のような「閉塞的」な問題状況に重ね合わせ

つつ，比較検討してみるとき，すぐれて歴史的かつ今日的な問題を，われわれ自身に提示してくれている書物である。

(二)

まず，二著のうちの一つ（松尾尊允『大正デモクラシー』1974年5月，岩波書店刊，800円）から見て行くならば，著者がその「はしがき」で述べているように，本書の課題には二つある。

その一つは，「大正デモクラシーが，時期により，そのにない手を交代させながら，次第に国民の間に根をおろしていく過程を実証することにより」，それが，専制的明治憲法体制を外面的に修飾しただけで，昭和のファシズムにたあいもなく踏みつぶされたブルジョア自由主義の徒花である」といったような常識的な見方を打破すること。もう一つは，大正デモクラシーが，日本帝国主義の確立後に形成されたが故に，出発点においては，「内には立憲主義，外には帝国主義」という指導理念をもっていたのであるが，「これが，社会主義と自由主義の二要素のからみあう運動の展開のなかで，どのように，またどの程度まで克服されていくのか，その実態を洞察すること」，である。これらは，著者によれば，「大正デモクラシーを論ずる場合に不可欠で，しかもこれまでほとんど軽視あるいは無視されてきた諸問題」であった。

本書の内容は，まず明治末年における大正デモクラシーの初期段階の様相をさぐり（第一部，第一～第三章），ついで，第一次大戦下，吉野作造の提唱による「民本主義」の成立基盤，その周辺を考察し（第二部，第四～第六章），最後に，大戦後大正デモクラシーの全面開花期の主要な問題点を明らかにする（第三部，第七～第九章）という順序になっているのであるが，これらのなかで，著者の設定した二つの課題は，果してどのように解決されているのか，さらに当の課題そのものは，どういう意味をもっていたのか。

そこで，第一の課題について見れば，ここでは大正デモクラシーの，民衆運動の側面を重視する著者の立場が随所に見られ，その幕あきを意味する日露戦争後の講和反対運動における民衆の動き，戦後軍国主義財政下の重税・悪税反対運動に起ちあがる非特権的な一般商工業者（中小ブルジョアジー，但しその上層）の動き等の叙述（第一・二章）を通じて，その実証が行われているわけであるが，とりわけ，第一次護憲運動から戦後，第二次護憲運動に至る，地方民衆レベルでのデモクラシー運動の分析に力点がおかれている。

すなわち，鳥取その他各地方小都市においても，中央大都市の思想・運動（自由主義に限らず，社会主義をも含む）の広範な影響下に，地方商工業者を中心にして，市民生活の日常的利益（営業税，電灯料金，地代，米価等々の問題）から出発した「市民的政治結社」の活動が活発となり，それが，これまでの明治藩閥体制の支配基盤であった伝統的地域社会を揺がし，普選運動への途を準備して行ったこと（第四章）。また，民主主義運動は，米騒動と内外無産階級運動の昂揚する情勢のなかで，いままで民衆の最底辺におかれて，封建的・近代的差別と抑圧の重石に喘いで来た被差別部落民をも動かして，全国水平社の結成に対応する各地方部落民の新たな自覚と組織運動を促すことになり（とくに，奈良県・大福部落の三協社の例），「上から」の善導・同化政策に対して，「下から」の自主的な解放運動が展望されるに至ったこと（第七章）。

そして，デモクラシー運動のこのような社会的滲透に際して，山川均等社会主義者が，その公式主義的発想と普選運動等ブルジョア民主主義運動への無理解から，無産階級・勤労階級の間の共同戦線の結成が出来ず，その不甲斐なさを露呈した（第六章）のとは対照的に，『東洋経済新報』，『東洋時論』，『第三帝国』等の論調を支えていた自由主義者あるいはブルジョア的急進主義者（石橋湛山，三浦銕太郎等）——かかる論調の頂点には，吉野作造をとり囲む「黎明会」や「新人会」の動きがあった——の啓蒙的役割がむしろ重要であった事実が，丹念に整理されていて頗る説得的である（第三・五章）。

しかしながら，以上の過程が，もともと明治以後の輸入思想にほかならない西欧的民主主義，自由主義，社会主義の，上から下への，中央から地方への，一方的な社会的滲透・波及として，開明的・文化的な知識層による地方民衆の無智蒙昧の克服という筋道で，余りにもキレイごとに描かれ過ぎているような感じを受ける。一般民衆とくに農村地域の民衆にとっては，デモクラシーは，当時も，なお外来思想であって，地方農村の伝統的な生活に根ざした民衆自身の「土着的」な意識とは，直ちになじめない性質のものであったはずであり，かれらが自発的な解放を目ざして行動する際には，この両者の間の複雑な対立・葛藤・からみ合いの関係が重くのしかかって来る。こうした事情を，民衆意識の内面にまで十分に掘り下げないで展開され

るブルジョア民主主義(史)論には，どうしても，一種の啓蒙主義的な尊大さと，その裏返しとしてのひ弱さとが避けられないのである。この点は，また，第二の課題の問題とも結びついている。

すなわち，本書の叙述全体を通して見るならば，以上の，大正デモクラシーの社会的滲透の過程が，同時に，その出発点における指導理念（「内には立憲主義，外には帝国主義」）が打ち崩され，克服されて行く過程でもあったことを示そうとしているかのようであるが，現実の歴史は，果して著者の意図する通りに動いていたのかどうか。

なるほど，デモクラシー運動の初期段階で，さきの『東洋経済新報』等を中心に，閥族打破，天皇制・帝国主義（領土拡張主義）批判，普選の主張と事実上の主権在民論，植民地放棄論（「小日本主義」）等々，「急進的自由主義」の論調が生れ，大戦後の民衆運動昂揚期には，「内には国民主権主義，外には非帝国主義」（『東洋経済新報』）という形で，「大正デモクラシーの最高の思想的達成の一つ」（第九章，309ページ）が見られるに至った。吉野作造も，当初の貴族主義的な民本主義の思想を一歩進めて，五・四運動や三・一運動など「自国の帝国主義に対する民族闘争に共感する」（300～301ページ）態度をとるようにさえなっていた。

しかし，このような一連の論調変化，政治思想史上の出来事も，やはり，大正期の文化主義・人格主義的な風潮の一齣として，エリートたる知識層による，ハイ・レベルでの思考変化にとどまっていて，それとは隔絶した被差別的な状況のなかで苦闘する民衆の生活次元の感覚・意識とは，大きなズレがあったのではなかろうか。社会主義者・共産主義者の思考をも汚染していた大国意識・差別意識は，かの関東大震災における，民衆自身の手による朝鮮人虐殺事件となり，やがては，天皇制ファシズムと侵略戦争への，民衆の積極的な同調・協力という悲劇的事態をもたらし，敗戦後の新憲法体制のもとでも，今日の「戦後民主主義」の大きな恥部を形づくっているのである。大正デモクラシーの成果と同時に，その限界が，深く問われねばならない理由も，またこの辺にあるといえるであろう。

（三）

以上が，大正デモクラシーについての，いわばオーソドックスなブルジョア民主主義(史)論であったとすれば，いま一つの論著（鹿野政直『大正デモクラシーの底流』1973年10月，日本放送出版協会刊，480円）は，「土俗的精神への回帰」というその副題が示しているように，民衆思想の内面に入り込んで，その情念の世界から眺めた，大正デモクラシーのいわば裏面史であり，前著の観方に対する問直しの意味をもつ書物ともなっている。

すなわち，著者自ら「あとがき」で述べているように，1960年代半以降，戦後民主主義が問われ，近代の価値そのものが揺ぎ，「"文明"の否定に短絡する発想」さえ生れるような，時代閉塞の今日的状況を凝視し体験しつつ，民衆思想史の研究を続けて来た著者が，単なる「大正デモクラシーの思想上の正統的な追求から，いわば「ディオニュソス的な世界」への転回をとげて行く過程で書かれた諸論稿によって，本書は出来上っている。

著者は，まず「序説　二つの"改造"」において，第一次大戦，「米騒動」以後の社会状況が，社会主義運動を先頭とする現状打破＝「改造」思想一色に塗りつぶされていたかに見えるなかで，革命への志向とともに，それとは逆の，ファシズムに帰着するような反革命への志向が，当時の思想家・運動家の意識のなかに，未分化のまま共存し，両者が微妙に交錯し合っていたことを認め，とくに後者の役割を重視する（そこには，旧自由党員から，国家主義者，社会主義者，無政府主義者等々に至る多彩な顔ぶれがあった）。ここから，著者独自の大正デモクラシーへの視角が生れて来る。すなわち，前著に見られたような，民本主義に発するデモクラシー運動の社会的展開，民衆への滲透という事実は，最近の諸他の研究成果とともに，十分に評価されるにも拘らず，しかもなお，1930年代に向けて，「そのデモクラシーがあれほどすみやかに凋落していったのはなぜか」（24ページ），20年代のさまざまの外的・政策的要因でなく，「デモクラシーを崩壊にみちびいた内的要因は何か」（25ページ）という問題が提起される。そして，著者は，この要因を，「文明開化以来の"近代化"政策によって，おしひしがれ，地底においやられ，大国日本のイメージのもとで冷嘲をうけ，大正デモクラシーのもとでも，その合理主義的開明主義的基調にささえられて，くすぶりつづけた」（25ページ）"土俗"的精神の噴出，それへの回帰——1910～20年代の精神史の底流に求めようとするのである。

かくして，民衆思想史の立場から，このような底流の動きを代表するものとして，創唱宗教，青年団運動，大衆文学，の三つの事例が選ばれ，これらを柱として問題状況が論ぜられることになる。

まず第一の創唱宗教においては（一 創唱宗教の思想——大本教と"立替え立直し"への衝迫——），1910年代から30年代にかけて世間の注目をあつめた大本教の，民衆思想史的な意味が問われる。

京都・丹波の綾部という僻地に生れたこの大本教が，国学・神道流の復古主義とキリスト教的終末観とを折衷した世界救済の教義（"立替え立直し"の思想）によって，比較的短時日のうちに，急速に民衆の心を把え，その組織を全国各地に拡げて行った事実の背景には，「上から」の資本主義の滲透（とくに，日露戦争以後決定的となる）により没落・分解し，疎外化されて行く地方庶民の，「近代化」に対する本能的な不信と反感，怨嗟と呪詛の情念がうっ積しており，それが"立替え"の教義によってほぼ完全に代弁されていたという事情があったのであり，そこには，かつての幕末期「世直し」思想の蘇生が見られるのであった。しかも，この民衆的な「世直し」志向の，全く悲劇的な展望は，米騒動，労働争議，小作争議等々，労働者・農民大衆自身の組織運動が昂揚して，危機的様相が激化して来るや，民衆救済の思想は，一転してこれらへの憎悪・敵意（反社会主義，反デモクラシー）を示すようになり，「世直しへの"せきこみ"がつよまれば強まるほど，天皇への帰一性がふかまるという矛盾」（62ページ）をあらわしつつ，その立替え構想が，結局，明治以来の国粋主義・膨脹主義路線にはまり込んで，日本帝国主義，天皇制ファシズムの露払い役を果すことになってしまった，という一連の経過に如実にうかがわれたのである。

第二の青年団運動の場合は（二 青年団運動の思想——長野県上田・小県地域の青年たちと農村受難の想念——），前著で考察された地方的な「市民的政治結社」の活動に相当する問題が，地域農村青年の，生活に根ざした抵抗と苦悩の姿を通して，よりなまなましく描かれる。

すなわち，当時の日本の基幹産業であった蚕糸業を地場産業にもち，その消長に自己の生活の運命を托していた当地域の青年たちは，第一次大戦後の恐慌から世界恐慌へと進む厳しい内外の経済環境のなかで，地場産業の苦難と密着した生活の場——むら「共同体」——を基礎としつつ，「閉塞」状況の打開，自己啓発と創造への活動をはじめていたが（青年会の機関誌刊行等々をはじめ），これは，「上から」の国家主義的・官製的なものとは相反し，また開明主義的なデモクラシー運動の地方版とも異なる，その意味で，一種の「草の根」運動的な性格をもつものでさえあった。とはいえ，二つの「改造」への志向は，ここでも，わかち難くからみ合い，危機状況の深化するにしたがって，「農村受難の想念」に発するかれらの意識と活動は，左右に揺れる屈折した軌跡を画きながらも，やはり，伝統的価値へと帰着することになる。資本主義への怨恨と被抑圧階級としての自覚を生み出しつつも，他方では，労働者階級，社会主義に対しても不信の念をもち，政党政治，議会制（民主主義）への反感をも強める，といったニヒルな絶望感と造反意識が，農本的反都会主義に収斂することを通して，1930年代の農村「自力更生」，「非常時体制」，軍国主義化の滔々たる流れのなかに埋没して行く過程は，「閉塞」状況のうちに孕まれる，ファシズムと民衆の問題についてのお手本を，まざまざと示してくれる。

第三の大衆文学の思想では（三 大衆文学の思想——中里介山と"大乗"の観念），大衆作家中里介山の長編小説『大菩薩峠』の作品展開，その雄大な虚構の世界のなかにあらわれた「民衆の絶望や昂揚その他もろもろの想念のあと」（34ページ）が，作者介山自身の想念とともに追及されている。

大正デモクラシー期から昭和の日中戦争期（1910年代初頭～1940年代）に及ぶ長い期間にわたって書き続けられたこの作品（及び，その執筆のかたわら書かれた時論も含めて）が，民衆思想史の視角から見て意味があるのは，それが，当時の時代相を一般に反映していただけでなく，西欧的・近代的なエリート主義の純文学に対する民衆的な大衆文学の地位をしめていた（日本文化の，いわば「二重構造」の下部を形成した）ことにより，また，学歴社会から疎外された介山自身の生い立ちとその性格とに支えられていたことによって，歴史の変動期における民衆の夢と期待，絶望と怨念等々の想念を，極めて象徴的に描くことが出来たからである。

介山の生きた時代状況に対するシニカルな批判を，幕末維新の動乱期の一大ロマンに擬して表現した，この大河小説を貫流していたものは，要するに，圧制者に対して虐げられた民衆を救済する「志士仁人意識」であり，西欧的・都会的な現代文明を拒否し，伝統的な農村生活を讃美する「反近代・農本主義」（ブルジョア批判と同時に社会主義不信を含む）であり，"愛民"の姿勢（民衆主義）と"英雄"待望の姿勢（英雄主義）との微妙なバランスであった。こうした意識は，やはり，さきの事例と同じく，"「改造」のいま一つの道"を意味するものであったが，そのニヒルな立場が，歴史の「虚像」を通して逆にその「実像」を浮び上らせるこ

とになっていた。例えば，幕末期の革命状況を，もっぱら尊攘（→藩閥）対佐幕という強者の次元で，維新変革や明治国家を理解して来た伝統的な維新史観（王政復古史観，皇国史観ばかりでなく，これを批判するマルクス主義史観も，生きた民衆を十分にとらえられない限り，同様の制約をもつ）を無視し去ることによって，いわゆる「未完の明治維新」の実像を，それとなく画き出していたのであった。

しかしながら，米騒動以後の“泥濘”状況のなかで，現状閉塞への絶望感が深まるとともに，あらゆる社会的矛盾の克服を，慈悲にもとづく救済という仏教回帰の方向に求める超越的観念（「大乗的精神」）に寄りかかって行き，それが，後半期の作品構想のなかに，さまざまな奇想天外のユートピアとなってあらわれたばかりでなく，介山自身も，「大アジヤ主義者」よろしく，眼を大陸へと向けつつ，満州事変，五・一五事件等々「昭和維新」への幻想に浸り，ファシズム・戦争体制への積極的な協力・献身へと自らを捲き込んで行ったこと。そして，戦争体制下，民衆生活が破壊され，介山の幻想が無残にも裏切られる時点に立ち到っても，なお国家への帰属・同一化の意識を脱脚し得なかったこと。またしてもここに，わが民衆史の，あるいは民衆思想史の悲劇が見られたのである。

以上三つの事例は，何れも，学者，知識人などのエリートとは異なって，現存体制にかたく“つながれた”民衆の，「“非合理”による“合理”の，ないし，“情念”による“理性”の，さらに“土着”による“西欧”の“超克”」（259ページ）をめざす，その執念にみちた苦闘と挫折の赤裸々な記録であった。そして，この民衆の想念の内部に入り込んで，それへの共感的理解を示して行こうとする著者の方法は，専門的な民衆思想史研究の避け難い「傲慢さ」（26ページ）を十分に自認しつつ，それを克服する道を模索しようとする著者の基本的姿勢に支えられて，アカデミックな大正デモクラシー論に対する問い直しを，極めて力強いものにしている。こうした情念的世界にわたる問題が，これまで，正攻的な社会科学的・思想史的あるいは運動史的研究によって，その禁欲的偽態のもとに，いかに蔑視され，無視されて来たかを，改めて痛感させられるのである。

それにしても，まことにやりきれないのは，土俗的精神の噴出の，余りにも虚無的な絶望的な姿である。かの幕末期に，維新への歴史変革の偉大な原動力をなした「在村的潮流」，民衆の「世直し」の想念が，明治以後，「上から」の「近代化」によって裏切られ，ねじ曲げられ，天皇制支配の呪縛に陥いってからというものは，ついに，負の方向への力としてしか働くことが出来なかったのか。それは，もっぱら，西欧の近代を理想化した「自由主義」，「民主主義」さらには「社会主義」によって，その無智蒙昧，固陋頑迷が啓蒙され，教育されねばならないものであったのか。ことは，ひとり大正デモクラシーにとどまらず，「戦後民主主義」の今日的状況の問題に係わるものでもあろう。

（四）

今日におけるわれわれ民衆も，また大いなる「時代閉塞」の状況のなかにおかれている。それも，大正期などとは比べものにならない高度な超管理社会と，「虚妄化」した民主主義制度のもとに“つながれた”まま，やり場のない疎外感・絶望感に打ちひしがれているのであり，そこには，やはり，現代的な「世直し」待望の想念とともに，ファシズム志向の無気味な底流意識もまた存在する。

しかし，今日の大衆は，もはや，自らの想念を，体制への怨恨や呪詛という消極的な形で表出するだけではなく，体制に同化し埋没して行く自己の加害者性を厳しく問い直しつつ，さまざまの「草の根」民主主義の運動を積極的に展開し，多くの限界はあるにしても，内外の状況に一定の影響を与え得るまでに目覚めて来ている。戦争体験とその責任性への反省に結びついた反戦・平和運動にしても，開発による破壊から日本人の「くらし」と「ふるさと」を守り，奪い返そうとする住民運動にしても，あるいはまた，日本の経済・文化侵略に抵抗する韓国・東南アジアの民衆運動への共感・連帯意識等にしても，すべて，民主主義や社会主義やナショナリズムの一般概念・イデオロギーなどから出発したものではなく，地域の生活経験に根ざした「人間の論理」を，今日的な，新たな形で表現したものであった。しかも，こうした志向が，“デラシネ”の都会文化には同化し切れない，地域社会の人々の生活感情，その祖先伝来の農村生活に培われた土着意識の地底から，業火のごとき怒りとなって噴出して来るという現実こそ（かの三里塚の成田空港反対闘争をはじめ，全国各地でねばり強く続けられている反公害・反開発運動を見よ），歴史の底流をなして来た民衆史，その思想・運動史の現代への継承の意味を物語るものであり，また，

「草の根」の思想・運動を生み出した民衆の，日常生活における知恵と倫理，いわば「常民」の問題を，すべて「封建的」・「非近代的」な人間関係・社会関係として割り切って来た，従来のブルジョア民主主義史研究，さらには，知性主義的な日本近・現代史研究全般のあり方にも，大きな反省を迫るものである。

勿論，ここで，「地域」への志向，「常民」の再評価などが，単に郷愁的なものに終っていたのでは，それは，かえって，都会人のコンプレックスをあらわすものに過ぎず，また，手放しの民衆礼讃，民衆信仰も，民衆の実像を見失うことによって，歴史の重大な陥穽に落ち込む危険性が多分にある。絶えず権力者によって裏切られつつ，自縄自縛に陥って来た民衆の姿が，このことを示している。しかし，いまや，自らの「虚偽性」を認めつつ，しかも，専門学者の知的「欺瞞性」をさえ見抜くに至った，今日の大衆にしてみれば，こうしたことは，学者たちが改めて指摘するまでもなく，大衆自身，かなりの実感をもって理解していることがらでもあろう。それにしても，民衆の情念あるいは怨念の力をかりてまで，「人間の復権」を主張しなければならない程に，われわれの「戦後民主主義」社会の人間的頽廃，その病患は重いのである。

二つの大正デモクラシー論が，今日の時代状況に投げかけている問題のなかに，明治以来の日本近・現代史の奥底に潜む，一種の“業”ともいうべきものが看取されるのであるが，これは，あながち，筆者のみの感想ではあるまい。

（1974. 10. 15）

（経済学部教授）